



# 海軍精神注入棒



koberyol

横須賀通信学校に正式入隊まで諸検査の実施との由で三日間は仮入隊であった。第一日目は身体検査で、不適格者は即日不採用で帰宅を命ずること。適格者は三日後正式入隊するとの説明を受けた。この三日間はお客様扱いであったが、何とも不安な毎日だった。

身体検査なども無事終了。正式分隊名と所属班の発表があり、分隊編成が行われた。

兵籍番号 横志飛 第3●●●59号

兵種 飛行兵 服役年期 昭和19年7月●日

横須賀通信学校の兵舎の内部は艦船仕様で陸上に浮かぶ船であった。居住甲板は縦に長く、われわれがそこに居住するのだと直感した。甲板上は多数のテーブルがあった。また、吊床用のアングルが頭上にあった。そのアングルに吊床用のフックがついているのが目についた。当時の予科練一個班は定員24名で右舷12名、左舷12名、一テーブルに左右に12名、2テーブルで24名、それが生活を共にする単位で、行動を共にする組織であった。

入隊前の前日、七つ釦の制服や、事業服（ふだんの作業の時に着用する服）、帽子、靴、手箱、「衣のう」など生活必需品一式が貸与された。同時に入隊するために着用してきた学生服、薬、学帽や下着、トランク、その他私物は梱包して、親元に郵送する手続きをした。すべて新しいものづくめで非常に疲労を感じた。

総勢の人員は不明だが、校庭で入隊式が厳かに行われた。学校長の訓示があったが、頭の中に入ってこなかったし、偉い人が参列していて威厳を感じた。

私はすべて初めてと驚きの中、第14期甲種飛行予科練習生、海軍二等飛行兵を命ぜられた。同時に第一期甲飛電信練習生と指定された。自分の心の中に誓ったのは、この若気の無鉄砲な気持ちは、体力と能力をためてやろうと思った。海軍というところは何事もいっぺん教えるだけで、あとは自分の体で覚えなくてはいけない。何事も五分前の心の準備、総々スピードが要求された。命令用語の「聞け」「かかれ」「待て」「使用止め」「整列」「歯を食いしばれ」「五分前」。慣れるに従って違和感が薄らいできた。敬礼も上手にできるようになってきた。

さて、私が苦手としたのは、吊床（ハンモック）である。吊床は、厚いキャンパスと、内味は薄い藁布団と毛布、それを直径1.5cm位のロープでくくる作業、吊床は吊っては下ろし、また吊る。これが時間がかかる。吊床訓練といって毎日数回吊ったり下ろしたり、これを60秒でできるようにするまで訓練する。訓練というより罰直（バッチョク）的要素が多い。吊床は寝るために使われるだけではない。艦船では戦闘のとき、砲塔とか艦船の防護用に利用する。また船が沈

没したときなど救命用のブイの役目にもなるので自分の吊床は命の二番目に大切なもので、これ等の用件を満足させるためにはロープでキャンパスをしっかりとくくらなければならない。これにスピードが要求されるから60秒は30秒に変化するよう訓練される。一つの甲板に144名の練習生は狂ったように行動するからその音は凄まじい。一人一人の競争であり、報告の遅い班はたるんでいると看做され、躰教育のプロセスの要素の判定になる。即ち罰直（バッチョク）である。一人の遅れは連帯の責任で、「海軍精神注入棒」と黒々と書かれた、金剛杖が火を吹く。

課業は午前五時十分総員起こし（拡声機）のラッパを聞き、五時三十分朝礼体操の開始であるので、吊床をくくって吊床格納庫に格納し、事業服を着用して、帽子をかぶって靴をはいて整列する。一日の訓練のはじまりである。